

『心』の背景——「先生」と「私」の経済的側面

王 文

はじめに

『心』における「先生」と青年の「私」の関係に関して、様々な説がある。戸松泉は、「私」が「先生」を慕って、「先生」と同じ「西洋」を専門として勉強していると指摘した¹⁾。玉井敬之は、「思想の血」が繋がっていると二人が「世俗的な名譽や因襲的な習慣に、はっきりと背をむけ「自己本位」の生活態度と思想をおしとおそうとする姿勢」を持つと述べた²⁾。いずれも、「私」と「先生」の精神的親密性、ないし類似性を指摘している。

しかしながら、ともに「道徳倫理性」に反した二人（Kと静との恋愛三角事件で道徳に背反した「先生」、「先生」を心配し、危篤状態の父親を捨て、道徳に背反した「私」は結局違う人生の軌道を選んだ。明治の終わりに自ら命を絶った「先生」と異なり、「私」は明治から大正にかけて新たな時代を生きていく。故に、「私」

と「先生」の間には根本的な相違性があると考えられる。精神的な観点から見ると、その相違性は二人の、「自己本位」と「道徳倫理性」に対する認識の差ともいえる。乃木大将殉死(古)「道徳倫理性」を強く表徴する武士道(行為)の記事を見た際にも、二人は異なる反応をしていた。激しく動揺した「先生」に対して、「私」の心には波紋が全く生じなかった。二つの世代の二人の態度を通して、明治時代を貫く「道徳倫理性」が徐々に「自己本位」に越えられていくことを見出せる。「私」は「先生」と同じ明治という時代を過ごしているが、二人は一時期同行するだけで、別方向に進んでいたのである。精神的な相違性を二人の実生活から考えると、そもそも「先生」と「私」には経済的立場の違いがある。ともに地方の地主家庭に生まれ育ち、近代的な教育を受け、学問を追究するという、上京した二世代の青年二人の生い立ちには確かに似通っているが、経済的には相当な差が

存在している。言い換えれば、経済的な差により、二人が生活上で直面する実状は大きく異なっている。金銭の有無が生活上の大きな問題である。経済的な差によって、思想的な相違が生じ、社会に対する見解、生き方の違いが起きるのではないか。

本論文は、まず二人における経済的な差の根源を掘り出し、主に経済面に基づき、二人が実家から受けた影響を分析する。次に実家を離れ、直面する生活の様相を比較する。当時の国民生活における経済的な基盤の変化が二人の実生活、さらに思想にどの程度の影響を与えたのかを分析し、明治末期における経済変遷と二人の思想の相違性との関係を明らかにする。

一 故郷での生活

「先生」と「私」の故郷を推定し、実家の経済状況に関する分析を行う。二人は実家での生活からどのような影響を受けたのかを探る。

I 「先生」と実家

i 「旧家」で育った坊っちゃん

「先生」の実家は既に「先生の遺書」の部分に書かれていた。新潟にある「古い歴史を有っている」「少しは

其界限で人に知られて(五十九)いた旧家である。「先生」は北国で育てられた田舎青年である。

明治初期の新潟は三府五港の一つとして選ばれて、政治的、軍事的に非常に重要な位置を占めていた。さらに農家副業が盛んで、明治十九年にすでに「地主王国」としての地位を確立していた。

「地主王国」と称する新潟は言うまでもなく、地主の天下であった。だが、地主といっても、財力により地位が分かれている。「鷹揚」に育てられている「先生」の、「相当な財産」がある「旧家」はどの辺に位置づけられるのかを考えていく。両親が生前どの位の財産を持つのかは書かれていなかったが、両親を失った「先生」は相続すべき遺産を丸ごと叔父に任せた。あとの数年間叔父はむやみに遺産をこっそり使って、そのうち「一時」「失敗」した「事業」を「此二三年来又急に盛り返し」(六十二)た。ようやく叔父の異様に気付いた「先生」が憤然として残った遺産を「時価に比べると余程少ない」金に変え、故郷から去っていった。親の遺産がそこまで「非常に減っていた」(六十三)にもかかわらず、彼は「利子の半分」も使えず余裕のある学生生活を送った。明治三十一年の時期、郵便貯金の預金利率は四・二〇四・八%である。固定資金が多くなければ、決して利子を沢山もらえない。そして彼は卒業後も働かず、常に奥さんを

連れて、音楽会や芝居などに通ったり、旅をしたり、豊かな生活を過ごしていた。「これでも元は財産家なんですよ」(二十七)と「先生」が自評した実家には確かに強大な財力がある。「先生」の父が先祖から相続した「旧家」は、地租改正前から歴史のある上流階層の家だと推測できる。

裕福な物質生活に伴って、当時地主層における独特な文化も次第に生じていた。

「地主王国」として知られた新潟県は、また「地主文化の王国」でもあった。地主たちは豊かな経済力をもって、全国各地から書画骨董を収集したり、(中略)あるいは進んで各地の文人墨客と交わって文化の吸収を図ったりした。(中略)文化に対する関心は早くから高められていて(略)

「先生」の父親はその中の一人と見られ、「茶だの花だのを遣」ったり、「詩集などを読」んだり、「書画骨董といつた風のもの」にも興味をもち、「比較的上品な嗜好を有つた田舎紳士だつた」(五十八)。「先生」はこの「詩や書や煎茶を嗜む父の傍で育つ」て、「唐めいた趣味を子供のうちから有つて」(六十五)、優雅な雰囲気を満たした典型的な新潟大地主の家庭で生まれた坊っちゃんとし

て成長していた。

「旧家」を相続した長男である「先生」の父親とは違い、次男である叔父は本家から離れて、隣の市に住んでいる。その叔父は「事業家」であり、「県会議員」であり、また「政党にも縁故があつた」(五十八)。兄弟二人は全く関係のない別生活をしているようだ。にもかかわらず、大地主であり、悠然とした「先生」の父は社会で活躍している叔父のことを感心し、「自分のやうに、親から財産を譲られたものはどうしても固有の才幹が鈍るつまり世の中と闘ふ必要がないから不可い」(五十八)と考えていた。そして、その考えをとくに「先生」に教え込んだ。

「先生」の父の態度を覗いて見ると、叔父との間には兄弟の感情以外に、他の繋がりが存在しているのではないかと思われる。すなわち、地主(父)と政治家、地方実業家(叔父)との関係も無視できない。明治期の新潟県には、地方政治に手を出す地主が少なくなかった。

新潟県は「地主王国」にふさわしく、巨大地主・大地主の比重は圧倒的に高いものの、その次に位置する中小地主、在村耕作地主の所有地が予想外に高かったことを意味する。言いかえれば中間的地主が一定の厚味を持って存在しているのであった。衆議院

議員、県議、村長、村会議員、農会役員など地方政治の担い手はおそらくこの階層を母胎として登場して来るとみてよいであろう。(前掲『新潟県史』通史編7)

次男である叔父は家を相続できず、自力でしか生活できない。自力といっても、たった一人の能力で政治や実業まで行うのは想像しにくい。家長の兄に頼り、分家された財力に基づき、出世したと考えられる。それで、叔父が「其市から時々道具屋が掛物だの、香炉だのを持って、わざわざ父に見せ」(五十八)、父と「妙に仲が好かつた」のは理解できる。政治に力を傾けている実業家たる叔父と大地主たる父との間に、経済的な繋がりが確実に存在していると考えられる。当時多くの地主は既に政治や実業に手を出したが、「先祖から譲られた遺産を大事に守って行く篤実一方」(五十八)の父はやや保守的に家業を続けている。だが、叔父との付き合い、また叔父への態度から覗いてみると、彼は伝統的な大地主でありながら、時代の変化を感じて、政治や近代実業にも関心を寄せていると考えてもよい。その関心が傍にいる「先生」に伝わったとも考えられる。

そうしてみると、坊っちゃんとして成長した「先生」が豊かな実家、とくに父親から伝統的な道德倫理を教え

られた一方、近代的な物事への関心も高まっていたと言える。「先生」の父は、「先生」が東京に修学することを許可しており、将来政治界、あるいは実業界に入る希望があったとも推定できる。両親が亡くなっていなければ、一人子である「先生」は自然に実家の相続ができ、上流階層の人間として、分野を広げて活動する可能性もあった。

ii 故郷を捨て去った「先生」

「先生」と実家の関係は悪くない、むしろいい関係を持っている。亡くなった両親への「先生」の思いがわずかに語られたが、家族の間の温かく安らぎのある雰囲気を感じられる。両親が亡くなった後、「先生」の心情については詳細に描かれなかったが、「茫然」とした彼の精神状態から深い悲しみを見出せる。上京する前、「先生」は家族、また親族との間に顕著な対立がなかった。彼は自分が「倫理的に生まれた男」、「又倫理的に育てられた男」(五十七)だと思ひ込んでいた。遺書を書く時分さえ、以前父が教えた教訓を「まだ忘れ」なかった。上京後にも、唯一の叔父を信じて、両親がいなくなった故郷を「懐かしげに」「望んで」、「自分の帰るべき家」と意識し、「何よりも温かい好い心持」(六十一)を持っている。「いくら東京を恋しがつても」、「故郷の家をよく

夢に見る「先生」は休みの際実家に戻って、叔父一家が住んでいる「父や母の居た時より、却つて賑やかで陽気になつた家」(五十九)を見て、嬉しく思った。

だが、叔父一家の好意は叔父が「先生」の財産を自分のものにするため、作り出したものである。その卑怯な意図が遂に表に曝された際、「先生」の「世界は掌を翻へすやうに」変わった。「何遍も自分の眼を疑つて、何遍も自分の眼を擦(六十一)った「先生」は金銭における人間の悪を初めて認識した。

両親を失って、まだ子供である「先生」はたった一人でこの世に残され、唯一の血縁である叔父に頼るしかない。暖かい叔父の愛があるから、「先生」は熱く故郷を愛していた。それに対して、信頼する叔父の裏切りにより、故郷に対する深い情熱が冷えてしまった。「道德倫理性」を重視する「先生」が叔父の利己的行為で、衝撃を受け、「他人不信」となり、自分の行先さえわからなくなつた。結局残りの遺産をすべて金に変え、心残りが無い故郷を捨て去つた。

「先生」はもともと上流階層に属する人間である。彼は裕福な家庭で生まれ、また「田舎紳士」である父に影響され、道徳性を重視し、近代的な物事にも興味を持ち、「倫理的」に育てられた鷹揚な田舎青年である。そして、道德倫理の視点から叔父の利己主義的行為を憎み、金銭

の価値、またその悪を改めて認識した。生まれてから金銭面には不自由と感じていない「先生」は、経済的に余裕のある生活を送る中で、自らの思想を形成し、国家主義的な「道德倫理性」を身に付けた。

Ⅱ 「私」と実家

ⅰ 中小地主家庭出身の青年

「先生」の実家が新潟であることは明白に書かれていたが、「私」の実家ははっきり明示されていなかった。

山影冬彦は、明治期椎茸の名産地により、青年の実家が静岡県にあることを推定した。さらに、「私」が最後に東京へ飛び出した場面では、当時の伊豆のある鉄道時刻とびったり重なつたと指摘した。⁽⁵⁾

なお、中山高明の『夏目漱石の修善寺』には、明治四十三年、漱石が修養のため、松根東洋城の誘いで修善寺を訪ねたことが詳しく書かれている。記録された漱石が東京から修善寺に行くルートはそのまま「私」の通う道と重なつた。したがって、「私」の実家を静岡県修善寺周辺と推測することができる。

「先生」の「旧家」とは違い、「私」の家は単に古く描かれていた。

私の宅の古い門の屋根は藁で葺いてあつた。雨や風

に打たれたり又吹かれたりした其葉の色はとくに変色して、薄く灰色を帯びた上に、所々の凸凹さへ眼に着いた。(四十一)

薄灰色の藁で敷いた家の中にも、「黒い煤けた棚」などが置かれている。「私」の目に映った実家は、古く、むしる質素なふうに見られる。「先生」の家に全く及ばない。家柄の差をはっきりと「私」が意識し、「先生」との会話にも吐露した。

「突然だが、君の家には財産が余程あるんですか？」

「あるといふ程ありやしません」

「まあ何の位あるのかね。失礼の様だが」

「何の位つて、山と田地が少しある限で、金なんか丸で無いんでせう」(二十七)

金がないと「私」が自ら述べた実家は決して財産家ではない。「山と田地が少しある」ことから、農家であることが分かる。周知のように明治六年全国で実施された地租改正により、土地私有になり、自作農、また寄生地主と小作人の農業生産関係が形成された。家主である「私」の父が持病を持って、長年その家に籠っている。たまたま「古い麦藁帽」をかけ、「薄汚いハンケチ」をも

って、庭に何かをするが、自ら働くのは不可能だと決まっている。にもかかわらず、特に困窮しているとも見えなくて、二人の息子を無事に大学生まで育てた。働かず、一定程度の収入があり、一家の生活を維持できる父は、やや裕福な中小地主層に位置づけられる。

そこで、「先生」と「私」の実家の財力差が見られる。「私」が過ごした明治中期以降、中小地主の実家状態を見ておこう。そもそも、地租改正は大地主に有利である一方、小作農・中小地主にはかなり厳しい負担を要求した。彼らは小作人から地租を貰うけれども、不安定な経済状況の中で自分も各税金を払わなければならない。相当地産を持つ「先生」の実家と異なり、財力を持たない中小地主層には余裕がない。特に日清、日露戦争に伴い、増加し続ける税金は農家経済に衝撃的な悪影響を与えた。その結果、農業者からの陳情が相次いでいる。

(前略)我等農業者ノ黙止スルニ忍ビザル所ナリ。元來地租ノ如キハ本租百分ノ式歩五厘ナリシヲ、日清戦役ノ後明治三十一年百分ノ參歩參厘トシ五ヶ年間ノ期限ヲ定メ國民ニ公約シテ増徴セラレタルモ、其ノ期限ニ至リ会々日露戦役ノ起リタル為メ之ヲ履行スルニ至ラズシテ更ニ非常特別税ヲ加へ、百分ノ五歩五厘ニ増加セラレタリ。(略)然ルニ政府ハ之ヲ以

テ負担力アリト認メラル、カ、從來農業者ノ負担ヲ
軽減スルノ意極メテ薄ク(略)

農業経済状態の変動に伴って、地主と小作関係が悪化して行く。明治三十三年の静岡民友新聞には「地主と小作との関係次第に疎遠となり、往々円滑を欠くは何くも同じ事なるが：」という掲載があった。地主階層の不安定が高まって、小作人への威厳が弱くなり、次第に元来平穏な地主小作農業が揺らいでいく。

日露戦争に向けた臨時特別税の加重が地主経営にも覆いかぶさり、地主経営の暗転を開始させる引き金になっていたのである。地主の支出は地租、県税、村費、区費、水利費、農会費によって占められる(中略)地主経済が外部からの圧力によって、その安定が揺るぎ始めたことに端を発して、両者の関係が変わり始めてきた(略)

明治末期まで続けた重税下の農村経済状況が深刻となり、小作人は言うまでもなく、中小地主の境遇も良いとは言えない。厳しい情勢に家計を維持する「私」の父が、「月給こそ貰つちやぬないが、是でも遊んでばかりゐるんぢやない(四十二)」のは事実ではないかと考えられる。

「先生」の世代のように平穏な農業経済の中で、主導的地位を持っていた大地主家庭とは違い、「私」の世代には、既に衰えていた農業経済の中で、懸命に生き延びる中小地主家庭が数多く存在している事実が分かっている。没落していく中小地主家庭の「私」は、徐々に変化した実家の経済状況に気付いたと思われる。日露戦後、全国的に経済不況になり、特に農業が衰えている。戦争の勝利による経済的回復への期待が外れ、国民が国家への信頼を失っていく。「吾等なりと信じたるアールヤの幻像は日露戦争によりて根柢より破壊せられ」たことを感じた「私」は、国家の経済政策、また経済政策を支える国家主義的な「道德倫理性」への疑いを持った。

ii 故郷から離れる「私」

「昔の親は子に食はせて貰つたのに、いまの親は子に食はれるだけだ(四十四)」という父の文句は、当時裕福ではない親たちの内心を表した。日清、日露戦後、「第一に富、富んだ上に教、教はどうするかといふと、少しは国家公共の爲めに働くといふことがなければならぬ」という国家の経済政策に基づいて、初等教育をはじめ、国民教育が変わりつつある大衆の教育熱は高まり、子供に教育をさせるのは子に対する情、「国家に対する義務」のようなものになった。峽水一父兄は次のように述べた。

昔は子どもをこしらえて飢えもさせず養育さへすれば、其親たるものの役目は済んでいた：今は養育と共に教育せねば、親の義務が済まぬと云ふ所謂負担が重くなって随分大儀の事である：殊に今の世は農工商業若しくは庶業何れの職業に従事するにも教育あるものでなければ實際役にも立たぬは事実である。

このように、親が子供に修学させるのは当時一般的なことと見ることが出来た。「卒業が出来てまあ結構だ」(三十七)と嬉しく言った父は、大学を卒業すればよい職を掴まえ、百円位な月給をもらえらると思つてゐる。教育投資の見かえりを期待しつつ、彼は次男が世間に認められ、よい社会的地位を得られることを望んでゐる。

一方、相続権を持たない次男の「私」は、実家の財産には「先生」のように執着してゐない。「私」にせよ、長男の兄にせよ、田地しかない家を相続しても大したことではないのが分かつて、実家のことを管む意欲がなかった。父が危篤になつた際、次男の「私」が兄に「家の財産は何うなつてゐるんだらう」(五十)と聞いたが、決して「土の臭を嗅いで朽ちて」(五十一)行く実家に戻る気はなく、ただ自分が財産をすこしでも得られるのかを心

配してゐるのである。同様に、既に九州で働く兄は「私」に「御前此所へ歸つて来て、宅の事を監理する気はないか」(五十一)と声を掛け、自ら家の相続を譲り、実家に戻るのをあきらかに拒否する。

「いくら東京を恋しがつて」も、「故郷の家をよく夢に見る」「先生」と対照的に、「私」は「父の無知から出る田舎臭い所に不快を感じ出し」(三十七)て、休み中実家に戻つても、頻りに東京の事を考えてゐる。「私」自身が田舎から離れる願望は強く見える。「其上に彩られる大都會の空氣」(四)が「私」の心に強い刺激、また「希望」と「緊張」を与えた。多数の上京する田舎青年と同様に、大都會での修学を通して、理想的な将来を手に入れることに憧れてゐる。

上述のように、「先生」と「私」は差がある地主家庭で生まれ、育てられ、多少異なる価値観を身に付けた。鷹揚に育てられ、豊かな実家と関係がいい「先生」は親の教訓を心に置き、伝統的な道德性を重視し、「倫理的」に成長してきた。従つて、道德倫理に反した叔父の利己主義的行為を憎み、人間の悪を認識し、他人不信に落ち日々衰えていく実家の経済状況を理解した「私」は、国家の経済政策、またそれを支える国家主義的な「道德倫理性」を疑い、世間や義理などを嫌がつて、故郷から東

京に飛び出し、理想的な生活を見つけていく姿勢を示した。

二 「二人」の上京後の生活

「先生」と「私」はともに学問を追究し、また出世の志を持ち、上京した地方の青年だと考えられる。実家から離れ、ひとまず独立生活を始めると言っても、結局実家からもらう資金により生活ができたのである。そこで、実家の経済的な差や社会的な経済変遷が、青年二人の上京後の生活、また思想に、どのように影響を与えたのかを検討する。

I 「先生」の上京

「先生」が故郷から離れ、東京で入学した「高等学校」は、明治二十七年に改称された三年制の第一高等学校だと木村功が指摘している。¹³⁾そして、かつて「先生」が小石川で下宿を探したとき、駄菓子屋の上さんが以下のような下宿の情報を教えてくれた。

主人は何でも日清戦争の時か何かに死んだのだと上さんが云ひました。一年ばかり前までは、市ヶ谷の士官学校の傍とかに住んでゐたのだが、厩などがあ

つて、邸が広過ぎるので、其所を売り払つて、此所へ引つ越して来たけれども……(六十四)

「先生」と「K」とが一緒に過ごした東京帝国大学時代は、早ければ日清戦争一年後の明治二十九年からだと推定できる。

明治二十八年、東京就学における学費は「一ヶ月拾貳圓、又尠くも六圓を多く降らざる範圍に於て、毎年十ヶ月間の支出を標準とする時は、一ヶ年間百貳拾圓乃至六拾圓を以て其総額とな」る。そのほか、各雑費、下宿料なども相当の金額が必要である。学生としての支出の中で、大きな割合を占めているのは学費と下宿料である。

最初叔父からの送金で生活する時期、「先生」は一般の下宿を選び、Kと二人で「二人も三人も机を並べて寐起きた」(七十三)「騒々しい」「六畳の間」で泊まっていた。それでも、しばしば叔父に小遣いを請求し、気楽に過ごしていた。

私の月々叔父から貰つてゐた金は……少ないものでした……私は少しの不足も感じませんでした……今から回顧すると、寧ろ人に羨やましがられる方だったのでせう……送金の他に、書籍費、及び臨時の費用を、よく叔父から請求して、ずんずんそれを自分の思ふ様

に消費する事が出来たのですから(五十八)

叔父と縁を切り、財産を取り戻した後、「先生」は以前よりも金銭の余裕を感じ、閑寂な素人下宿を見つけて、小石川の辺へ引越した。その部屋の様子は「高等下宿」といつた風の家」より立派だった。

其所は宅中で一番好い室でした。(中略)室の広さは八畳でした。床の横に違ひ棚があつて、縁と反対の側には一間の押入が付いてゐました。窓は一つもなかつたのですが、其代り南向の縁に明るい日が能く差しました(中略)床に活けられた花と、其横に立て懸けられた琴を見ました。(六十五)

下宿の場所により、部屋の広さがやや違うが、学生が泊まった下宿はだいたい四畳、あるいは六畳であった。「八畳十畳ノ如キハ間代高ク借者少ナキヲ以テ甚タ稀ナリ」⁽⁵⁾。当時、「先生」が泊まった「八畳」の部屋は相当いいものである。それに、各雑費をまた別に払わなければならぬ。「先生」は引越後、またKを誘つて来て、「二人前の食料」を「そつと奥さんの手に渡」(七十)したり、「華奢な食卓を奥さんに寄附」(八十)したりした。実家には財力がある「先生」はお金に困ることが

ない。彼の学生生活は一般的な学生の程度を超え、贅沢ともいえる。

物質的にはまったく心配がない「先生」は、始終豊かな生活をしている。彼はひたすら学問に向かつて、「偉くなる積」であった。国家主義高揚の日清戦争の前後、大地主階層である彼の実家は、国家の政策で有利な立場に立ち、悪影響を与えられなかった。子供の時期からより強化される国家道徳教育(小学校時代における教育令、中学校時代における教育勅語の発布)を受け続ける「先生」は、この時期の国家主義にもっとも影響を与えられた。そして、当時の国家経済の発展に應じるため、国家道徳教育が普及した上、「大学を経たものは中學校に於いて養成されたる國士たる資格の上に高等の學術技藝を抱きさうして國家の種々の要務を負担する。」⁽¹⁶⁾というエリート人材の育成を中心とする教育も実施されていた。明治二十四年から二十八年の四年間、東京帝国大学の文科卒業生は僅か六十四人、名実相伴うエリートであった。「先生」は、エリートの一員として卒業して、「横浜を出帆する汽船に乗つて外国へ行く」(十)友人を持ち、「今著名になつてゐる」「昔の同級生」を「ひどく無遠慮」(十一)に批評する学問がある。学識豊かな「先生」は国家経済政策に応じた教育政策から相当な利益を受けた。

要するに、実家の財力で余裕のある学生生活を送った

「先生」は国家の経済政策の不利益を感じていない。国家主義、国民道徳を含めている「道徳倫理性」を自然に受け入れたと考えられる。「大分世間に信用のあつたもの」(六十四)である「先生」は、自分の経済的な優位性を認識し、「自己」の実現を求めつつ、国家の担い手になることを目指していた。

II 「私」の上京

i 「私」の上京生活の実態

「私」は明治天皇が崩御した明治四十五年に卒業したとはっきり分かっている。また、明治天皇は「私」の大学の卒業式へ行幸することから、「先生」と同じく東京帝国大学だと判断できる。したがって、入学は四十二年だと判断してもよいだろう。

「私」の住む所は遠く走る電車の音が聞こえる「目眩るし」い二階である。武田勝彦は、「明治四十二、三年以降とみると、市電が延長されたので」、「私」の下宿が東京帝国大学の学生が多く住む本郷周辺より、「牛込の神楽坂、矢来あたりまでを含める可能性になる」と指摘した。さらに、卒業のお祝い後、「私」は「先生」の家から「人通りの少ない夜寒の小路を曲折して賑やかな町の方へ急い」で帰った行先も神楽坂ではないかと述べた。¹⁸⁾ 下宿自体も、住む場所も「先生」が住んだ閑静な高等下

宿には遥かに及ばない。

住む場所が粗末である一方、修学の各費用は却って「先生」の時代より高くなった。一等下宿料を例として、明治三十七年には九圓五十錢に上って、明治四十二年にはさらに十二圓に上って、明治二十七年の三倍になっていた。²⁰⁾ 下宿料と同様に、学費も上がり、明治三十七年の時点で月に「先づ十五六圓を普通とし、二百圓、都合千八百圓を要する勘定にな」った(前掲『官公私立諸学校改訂就学案内』。「先生」が就学中叔父から貰ったお金は、「私」が「御父さんから送つてもらふ学資に比べると遥かに少ない」(五十八)が、不足とは感じなかった。しかし、より多い学資を貰った「私」は却ってやや窮屈な生活を過ごしていた。

「私」の学資などは月々実家から送ってくれたもので、しかもそれ以上余裕がない金額だとみられる。鎌倉旅行の際、わたしは「多少の金を工面して」、また「鎌倉でも辺鄙な方角」(一)の宿を取った。父の病気を心配し、急に実家に帰った際も、「三等列車」程度の旅費を出せなかったため、仕方なく「先生」から借りた。無論「先生」のようにいつでも小遣いを請求できないし、「ずんずん思ふ様に消費」できない。実家の経済状況は「私」の上京生活に影を落とす。平穩、かつ豊かな「先生」の学生生活に対して、そもそも余裕のない「私」の生活は

どんどん上昇する物価の影響でさらに厳しくなった可能性が高い。

それに、学生数が少なかった「先生」の「エリート」時代とは違い、日清、日露戦争後、国民教育が重視され、学校数が一気に増加した。以前のエリート教育より、大衆教育の傾向が顕著になった。従って、中学校卒業生数、大学進学数も増えていった。競争が激しい東京帝国大学でも、明治三十九年から四十三年までの文科卒業生が五三九人、明治四十四年から大正四年まで文科卒業生が四三二人となり(前掲『東京大学百年史』 通史二)、「先生」の時代に比べると、数倍に上った。

また、卒業生の進路から見ると、「先生」の時代に当たるとる明治二十六年から明治三十年までの一七四名の文科卒業生のうち、三分の一以下の五十二人が学校教職員として勤めている。そのほか、官吏が五名であり、会社員は二名である。それに対して、「私」の時代に当たる明治四十一年から四十五年までの四九八名の文科卒業生のうち、約半分の二三人が学校教職員として勤めている。そのほか、官吏と会社員が各一人で、極めて少ない(前掲『東京大学百年史』 通史二)。文科卒業生の進路は官吏ではなく、一般教育職に勤める傾向が見られる。日清、日露戦後地方中学校の急増で、教員が足らず、文科卒業生が地方に赴いたのも原因の一つである。「中学教師の

職は確かに多くの文学士にとって最もありふれた就職口であった(前掲『東京大学百年史』 通史二)が、教員待遇は必ずしも良いとは言えない。

明治四十四年度東京府立第一中学校の『職員進退誌』によれば、教員の平均月給は四十七円九十三銭と算出できる。一方、明治四十一年私立山脇高等女学校の『職員調』によれば、全体では三十二円六十九銭である。私立中学校の給料は府立よりかなり低くなると見られる。つまり、当時の教員数が増える一方、教員全体の給料が抑えられていた。『坊っちゃん』の世界では、「四国辺」にある教師の「月給は四十円」である。友達が「私」に譲った「地方の中学教員」の待遇も同程度であると考えられる。卒業に伴い、「私」は窮屈な生活に陥る現実に直面しなければならぬ。

ii 明治末期就職難の環境に陥る「私」

「私」と「先生」の同級生の就職状態には、差がはっきり見られる。明治末期に就職難が問題化し、「私」は極めて不利な状況に陥った。植松考昭は就職難を「中流階級の教育ある子弟を襲へる」問題と指摘した。また、高等職位を「得ざる者はみんな失敗者なり」という教育理念が深く青年たちの心に滲み込んだため、官吏あるいは準官吏、大会社、大銀行に職を得るのみに価値がある

という社会現状を批判した⁽²³⁾。植松が述べたように、大学から卒業した青年たちは、高等職業しか望まず、地位の低い職に勤めることや田舎の実家に戻ることを考えなかった。明治四十二年の時点で、望む職業に就職できない卒業生が約九七五〇人出た。それに対して、一般職業には大量な欠員が生まれ、もっとも人が足りない農業の欠員数は約三十六万人に昇った⁽²⁴⁾。高等教育卒業生の人数が年々増えていくのに対して、社会の経済的な需要がついて行かなかった。『東京日日新聞』には、「近年、経済界の不振打続きで新事業計画の創設なく：学校に於ける優等の成績も必ずしも就職の保証と為らず、其の好む所に従うて自由に職業を選択せんことは更に一層の困難なり⁽²⁵⁾」という記事が掲載されている。希望する職位を得られない学生は卒業しても働かず、就職難になっていた。奥さんが卒業したばかりの「私」に「御役人」になるのかを聞いた時、「私」も「先生」も笑い出した。その笑いは「御役人」になるのはほぼ不可能であることが分かった上、奥さんをごまかすものだと考えられる。

そして、就職難に陥っても、「何か糊口の口がないか何か生活の手蔓がないかと朝から晩迄捜して歩いて居る⁽²⁶⁾」一方、「糊口も糊口だが、糊口より先に、何か驚嘆に値する事件に合ひたいと思つてる⁽²⁷⁾」青年が多数である。現実に直面せず、学生時期と変わらず、自分が思う

理想の生活に憧れている彼らは、果たして一定の経済基礎を持っている。奥さんは、なかなか仕事を考えない「私」に、「あなたは必竟財産があるからそんな呑気な事を云つてゐられるのよ(三十三)」と言った。奥さんの言う通り、既に卒業した「私」は、結局「父に向つて当分今迄通り学資を送つて呉れるやうにと頼んだ(四十四)」。すなわち、自分が戻りたくない実家に頼っていると考えられる。

ところで、高等職位が足りないにもかかわらず、大会社などでは独特な慣習が生じた。「三井銀行ならば慶応義塾出身者、同物産会社ならば高等商業学校出身者、日本郵船会社ならば帝国大学出身者」のような同校出身者がお互いに紹介するルールとなった。銀行会社も、学歴と実力のほか、重役連の紹介とした二名の保証人がいるという入社条件を作り出した(前掲『立志之東京』)。さらに、紹介の有無が職位、即ち給料に反映する。漱石の紹介ですぐ朝日新聞文芸欄の正社員となる森田草平は月六十円の給料をもらう。それに対して、ほぼ同時期に創作と無関係の校正部門に入った石川啄木は月給二十五円で貧しく過ごしていた。就職難に苦しんだ大勢の青年が、やがてそれなりの社会的地位を得ようと考え、既に地位を持つ人から紹介をもらえらるるようになり出した。『彼岸過迄』における敬太郎が希望する仕事を得るため、日々

走り回って、終に同窓の須永に頼んで、須永の叔父から仕事を紹介して貰うようになった。なかなか仕事を決められない「私」も母に注意され、「先生」から仕事を紹介して貰うように念を押された。職を得るため、いずれかの手段を使うことが分かる。

しかしながら、就職できない卒業生の数は上昇し続けた。ついに各界から注目を集め、各新聞社、雑誌のほか、幸徳秋水の『平民主義』など社会主義書物にも就職難の問題がしばしば取り上げられていたようだ。政治問題に関わっていくおそれがあった就職難は、なおさら深刻化したと見られる。『東京社会新聞』には、「然かも此輩が折角の学問も身を立つるに足らずして高等卒業の群に落ち込むや、漸やく国家の教育制度を呪詛する不平漢と為り、更に進んでは社会組織の根本に疑を挟む一種の革命児と為るに到らん」という記事が掲載された。就職難問題が政治的問題になっていて、無職の卒業生はやがて国家に警戒される対象になってしまった。「学校の講義」も、「教授の意見」も重要だと思わず、頓着せずに卒業証書を机に放り出した「私」は、学生時代にすでに厳しい現実を意識し、国家の教育政策を疑っていると思われる。そして、卒業後父を棄て、「先生」のいる東京に赴いた「私」は、実家からお金をもらえなくなり、今迄持っていた経済基盤を失ったとも考えられる。実家からの

経済源を失った「私」は、より厳しくなった生活でさらに不平を感じ、「革命児」になる可能性もないわけではない。

実家には財力があり、経済的に困らない「先生」とは異なり、没落していく中小地主家庭の「私」は、学生生活に窮屈さを実感した。そのため、実家の経済に悪影響を与えた国家の経済政策に対する不満がますます高まって行くと考えられる。そして、やがて高等教育を受け、没落した実家から飛び出したが、また就職難の状況に陥っていた。「私」は国家の経済政策を疑った上、さらに国家の教育政策にも失望したと考えられる。国家の経済的な問題によって起きた一連の問題に追い詰められた「私」は、「先生」のように、国家の経済政策や教育政策などを支える国家主義的な「道德倫理性」に拘っていない。代わりに、個人的な意欲、いわば「自己」の実現を強く主張する。

要するに、実家の経済的な差や社会的な経済変遷が、「私」と「先生」に異なる影響を与えた。経済的に困らず、かつエリートとして育成された「先生」は国家主義的な「道德倫理性」に傾いた。経済的に徐々に厳しくなり、就職難に陥っていた「私」は国家主義的な「道德倫理性」を疑い、「自己」を強く主張するようになった。

終わりに

「先生」と「私」の実家の経済状況、及びそれが彼らの生活に与えた影響の比較を通して、二世代の二人は異なる階層、異なる社会的経済状況のもとで過ごした青年であることを明らかにする。

「先生」は明治中期、農業が発達する新潟県の大地主家庭で育てられ、多額の財産を持ち、終始上流階層的な生活を過ごしていた。実家は国家利益と衝突することがなく、経済的な不利益を感じていない。「先生」は国家主義的な「道徳倫理性」に傾いている。さらに、国家の経済政策に応じる国家教育政策の恩恵を受け、学問に専念し、国の担い手になることを目指している。「先生」は「自己」を主張する近代教育を受けても、常に「道徳倫理性」に目を向けて自省する。従って、叔父の利己主義を憎み、さらにKの事件で自分のエゴイズム(利己)を「自己」と混同し、深く身に付けた「道徳倫理性」に背反する自分を嫌悪することになった。

一方、「私」は明治後期の中小地主家庭に生まれた次男である。「先生」の青年時代における平穏な農業経済とは違い、日清、日露戦争後、国家経済構造が大きく変わり、農業が衰え、中小地主層は没落していく一方であった。「先生」と経済的な差がある「私」は、国家の経

済政策に不利益を及ぼされ、国への信頼感が薄くなり、国家主義的な「道徳倫理性」を疑っている。さらに、卒業後社会に足を踏み入れ、深刻化した就職難に直面し、経済的に一層厳しい状態になり、国家の教育政策を疑う可能性が高い。国家主義的な「道徳倫理性」に拘らず、現実から逃げず、改めて「自己」の立場を見直し、社会状態からどう抜け出し、自分なりの生活を続けるかが当時の「私」の実状である。

要するに、明治中後期から大正にかけて、経済的な変遷が、家庭を通して、社会を通して、国家の未来を負う青年たちに影響を与えた。財力がある大地主出身の「先生」は国家の経済政策に不満を持たず、国家主義的な「道徳倫理性」を重視する。一方、経済的に衰えていく中小地主家庭の「私」は国家の経済政策、教育政策を支える国家主義を疑って、国家主義的な「道徳倫理性」を軽蔑し、自己の実現を重視している。明治末期の青年たちの思想形成において、経済的な変遷は一つの不可欠な要因である。つまり、経済基盤により二人が異なる思想を形成したのである。

底本…夏目漱石『心』(『漱石全集』第九卷 岩波書店
一九九四年九月)

【注】

- (1) 戸松泉「『こころ』論へ向けて——「私」の「手記」の編集意図を探る」『相模女子大学紀要』一九九四年三月
- (2) 玉井敬之「『こころ』をめぐる」『日本文学』一九五九年三月
- (3) 『日本銀行百年史 資料編』日本銀行 一九八六年九月
- (4) 『新潟県史』通史編7 (新潟県 一九八八年三月)
- (5) 山影冬彦『夫婦で語る『こころ』の謎—漱石異説』(彩流社 二〇〇六年一月)
- (6) 中山高明『夏目漱石の修善寺』(静岡新聞社 二〇〇二年九月)
- (7) 「地租軽減につき小笠郡東山口村民の陳情」一九二六年八月二十日 『静岡県史』資料編18 静岡県 一九九二年三月
- (8) 「地主小作関係の悪化」『静岡民友新聞』一九〇〇年一月十二日
- (9) 『静岡県史』通史5 (静岡県 一九九六年三月)
- (10) 長谷川天溪「幻滅時代の芸術」『太陽』一九〇六年十月
- (11) 田口卯吉「東京政治学校開校式に於て」『東京経済雑誌』一八九八年十一月十九日
- (12) 峡北一父兄「小学校教育に対する私見」『山梨教育』山梨教育会 一九〇四年九月
- (13) 木村功「『こころ』論—先生・Kの形象に関する一考察—」『国語と国文学』一九九一年七月
- (14) 黒川俊隆『明治28年東京遊学案内』少年団 一八九五年一月訂正再版
- (15) 黒川安治『地方生指針 明治24年東京遊学案内』少年団 一八九一年六月
- (16) 久保田讓「教育制度改革論」『東京経済雑誌』一九九一年十一月
- (17) 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史』通史二(東京大学 一九八五年三月)
- (18) 武田勝彦「漱石の東京 こころ」『早稲田大学教養諸学論集』一九九二年三月
- (19) 上村貞子「官公私立諸学校 改訂就学案内」(博文館 一九〇四年六月)
- (20) 渡辺光風『立志之東京』(博報堂 一九〇九年十月)
- (21) 門脇厚司『東京教員生活史研究』(学文社 二〇〇四年二月)
- (22) 植松考昭「我就職難と社会上の影響」『東洋経済新報』一九二二年一月二十五日
- (23) 植松考昭「現代青年の就職難について(六)」『東洋経済新報』一九〇九年八月五日
- (24) 植松考昭「現代青年の就職難について(五)」『東洋経済新報』一九〇九年七月二十五日
- (25) 「官私学校卒業生」『東京日日新聞』一九一〇年七月六日

- (26) 夏目漱石「道楽と職業」『漱石全集』第十六卷 岩波書店 一九九五年四月)
- (27) 夏目漱石『彼岸過迄』『漱石全集』第七卷 岩波書店 一九九五年四月)
- (28) 「高等失業者問題」『東京社会新聞』一九〇八年七月二十五日)

(オウ プン 本学大学院博士課程後期)

